



Title	Sarah Orne Jewett : Deephaven-ニューイングランドにおけるプロヴィンシャルイズムと女性中心社会-
Author(s)	金井, 公平
Citation	明治大学教養論集, 224: 59-75
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12218">http://hdl.handle.net/10291/12218</a>
Rights	
Issue Date	1990-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# Sarah Orne Jewett : *Deephaven*

——ニューイングランドにおけるプロヴィンシャルイズムと女性中心社会——

金井公平

Sarah Orne Jewett (1849-1909) が20代の時に書き始め、1877年に一冊の本にまとめて出版した *Deephaven* は、それからおよそ20年後に書かれた *The Country of the Pointed Firs* (1986) としばしば比較される。これらの作品は、いずれもメイン州の海岸に面したどこかの小さな村の風景や習俗を、訪問者の視点から描いている。*Deephaven* によって Jewett は作家としての地位を確立するが、この作品には後者の作品において円熟し結実する、すべての要素の萌芽が見い出される。

しかし Ann Romines は “In *Deephaven* : Skirmishes Near the Swamp”<sup>(1)</sup> のなかで、*Deephaven* の語り手 Helen Denis とその友人 Kate Lankaster が *Deephaven* という地域社会に本当に溶け込むことがなく、実は目に見えない仕切り、“transparent partition”<sup>(2)</sup>によって保護され、自分達自身の生を十分に体験することなく済ませていると批判している。

たしかに語り手も Kate もボストンの上流社会の人間である。2人が Kate の大伯母の遺産である *Deephaven* の屋敷で夏を一緒に過ごすことになったのは、どうしても互いに別れたくない気持から、いわば2人だけの逃避行を思いついたからである。それも24歳という彼女らの年齢にしては、いささか少女趣味が過ぎる、ボート遊び、浜辺での砂の城づくり、貝殻の収集、どこにでも人形を持ち歩いて楽しもうという計画であった。一方 *The Country of the Pointed Firs* の語り手は人生経験が豊かな年齢に達している。彼女は訪問客であるが、彼女

の相手となるのは逗留先である Dunnet Landing の家の女主人 Mrs. Todd で、生粋の地元の人間である。語り手と Mrs. Todd との友情が深まるにつれ、夫人の導きにより、語り手と Dunnet Landing との関係も深まっていく。それに語り手と Dunnet Landing との関係は、冒頭にあるように “the growth of true friendship maybe a life-long affair”<sup>(3)</sup> であって一夏の付き合いに終る性質のものではない。

しかし、作者 Jewett 自身が1893年の *Deephaven* 第2版の序文で率直に告白しているように、この作品の価値は大部分 “youthfulness”<sup>(4)</sup> にあるといえる。序文を書いている時点、つまり1893年は *The Country of the Pointed Firs* の創作時期とさほど違わないが、作者は当時の自身を含め2人の主人公たちの “grandmother”<sup>(5)</sup> であるかのごとき感じを抱いている。Kate と語り手の “simple adventures”<sup>(6)</sup> は若さゆえに可能であった部分が多いのである。成長した作者は彼女らを “rural pleasure”<sup>(7)</sup> を熱心に探求する “pioneers”<sup>(8)</sup> であったと位置づけている。また語り手 Denis が無心に書きつけた田園風景や人々の生活ぶりを、激しい都市化の波にさらされ失われていくプロヴィンシャルイズム（地方色）という面から明確に取らえ直している。

Jewett は20年間の間に都市化の動きが活発になったことにより、“crowded towns”<sup>(9)</sup> と “open country”<sup>(10)</sup> とは新たな相互依存関係に入ったと述べている。都会と地方の結びつきが決定的になったのは、何よりもまず鉄道の発達によるところが大きい。南北戦争により北部人が初めて故郷を離れ外界を認識したことが、戦争以前は海や山の数少ないホテルの滞在客は南部人にしめられていたのが、戦後は北部人も同様の行楽をするようになったこと、都会と田舎の両方に家を持つ人の数がふえたことなどを上げている。しかしその結果、観光客や夏の滞在者の落していく金が、昔ながらの村の姿を破壊することに熱心な人ばかり渡るといふ皮肉な現象が起ってくる。

Tradition and time-honored custom were to be swept away together by

the irresistible current. Character and architecture seemed to lose individuality and distinction.<sup>(11)</sup>

ビーアドの『アメリカ合衆国史』<sup>(12)</sup>には、アメリカ人がますます都会化し、それまでの農業や製造工業の生産方法が、もはや時代遅れになったことが述べられている。「全国的な規模をもつ新しい法律，習慣，制度，社会問題の侵入の前に，地方主義は後退しつつあった。」<sup>(13)</sup>それでも Jewett は，ニューイングランドの特色が完全に一掃されたわけではなく，“inborn divine instinct toward what is simplest and best and purest”<sup>(14)</sup>を理解する田舎の人々が依然として存在していると信じている。“Human nature is the same the world over”<sup>(15)</sup>と主張する彼女は，都会生活の現代性，地方生活の保守性というものは，これからも変わらないであろうが，都会人が地方の静かな風物や人間に接することにより，“a gift from the spirit of the past”<sup>(15)</sup>を受取るかもしれないと考えている。作者のこうした考えをあえてもう少し敷衍すれば，*Deephaven* の2人の主人公は都会の人間ではあっても “the spirit of the past”<sup>(16)</sup>を理解する “inborn divine instinct”<sup>(17)</sup>にめぐまれているといえるのである。

*Deephaven* という場所に関しては，地図のどこを探しても見つからないと Jewett は書いている。登場人物も Miss Chauncy の場合を除いて，実人生から借りてきた人物はいないことになっている。一方批評家は作者が知っている Portsmouth, York, Wells といった地名をモデルとなった場所として上げている。作者のまったく知らない Fairhaven という地名まで上げる批評家もいる。だが，この作品が sketches であり，いかに似ている場所があろうとも，Jewett の虚構であるという主張，風景自体が頭の中にしか存在しないという主張は重視すべきである。リアリズムの手法を使っているが，彼女の最終的なねらいは，現実の対象を忠実に写し再現することではないからである。

そこでこの作品にあらわれているプロヴィンシャルイズムと女性中心社会の様相，特に女性像に焦点をあて Kate と語り手の目にそれらがどのように取らえら

れているかを見ていきたい。

Josephine Donovan は *Deephaven* には互いに相入れない内容の 2 つの “separate texts”<sup>(18)</sup> があるといっている。1 つは “romantic, escapist story of the girl’s relationship”<sup>(19)</sup> であり、もう 1 つは “the description of a nineteenth-century New England port village that is suffering an economic decline”<sup>(20)</sup> である。この Kate と Denis の関係は、作者の若い頃の Kate Birkhead というロードアイランド州ニューポートの女性と作者自身との実際関係を作品化したものである。しかし 2 人の関係は最初の数章を除いては作品中ではあまり語られることがなく、2 番目の text, 具体的には *Deephaven* での見聞と人々との交流が主として語られている。語り手 Denis は人々との交流の場で、自らが前面に出ることはなく常に Kate の傍らに立ち、Kate の対応ぶりを、Kate を中心にした交流を語っていく。そもそも Kate は故人となった大伯母 Miss Katharine Brandon を訪ねて以前 *Deephaven* に来たこともあり、土地の人たちにとってまったくの他人ではなかった。

語り手の上げている Kate の美点を要約すると、人々の信頼を勝ち得る並々ならぬ能力を持っていて、相手の立場に立って対応するこつを本能的に、確実に心得ている。彼女が心から同感し興味を持つので、だれもが彼女と話をする気になり、友人になりたくなるのである。また彼女は礼儀正しく見せようとするためでなく、親切でありたいと思うために礼儀正しいのであり、恩きせがましい態度はみじんもない。並はずれた才能はなくとも、自分なりの魅力あるやり方で万事を進めていき、深い学識はなくとも多くの賢い人間の知らないことを知っている。ささいなことも大切なことも等しく忍耐強く学ぶ姿勢を保持しているが、彼女から教わることもたくさんあるのである。こうした Kate の魅力が、まさにこの作品の魅力を形成している。語り手は自分自身については、父親が海軍に属しているという運と不運とを持っていると語っている。つまり彼女はどこにいても、すぐに満足できるし気楽にくつろげると思っている。

Kate と語り手が滞在した Brandon House は、ポプラが一列に並んで植って

いる後ろにある、堂々としたジョージアン風の白塗りの家である。ライラックとバラの植込みがあり、にれの大木が家のわきや道路ぎわにそびえている。この家の詳細な描写により、メイン州 South Berwick にある Jewett の家とそっくりであることが指摘されている。

Deephaven は海に面した小さな漁村であるが、社会序列が厳密で明確に決められていて、人々はかつて Governor Chantrey が生きていた黄金時代を誇りにしている。Chantrey の住んでいた館は今は焼け落ちて何も残っていない。それでも年老いた人々は過ぎ去った栄光を今だに現在のことのように語ろうとする。

Deephaven is utterly out of fashion. It never recovered from the effects of the embargo of 1807, and a sand-bar has been steadily filling in the mouth of harbor.<sup>(21)</sup>

この時代おくれの村は経済的には1807年の出港停止法の影響から決して立ち直れず、わずかに漁業が現在の住民の主たる生業となっている。誰れも“excitement”<sup>(22)</sup>を好まず、“active life”<sup>(23)</sup>を送りたいと思うならば外へ出ていくしかない。新しい船が建造されることもなく、使えなくなった船の残骸があちこちに朽ち果てていく姿をさらしている。語り手はその姿は“something piteous”<sup>(24)</sup>だと表現しているが、それはともかくも情緒を感じさせる風景たり得ているといえる。閉鎖的な所で、人々は“no disagreeable foreign population”<sup>(25)</sup>がいないことを感謝している。村の経歴について上流階級の人々が“fierce pride”<sup>(26)</sup>を抱いているだけでなく、漁師たちも Deephaven の住人であることに満足し“their privilege”<sup>(27)</sup>を理解している。

It seemed as if all the clocks in Deephaven, and all the people with them, had stopped years ago, and the people had been doing over and over what they had been busy about during the last week of their unambitious

progress. Their clothes had lasted wonderfully well, and they had no need to earn money when there was so little chance to spend it ; indeed, there were several families who seemed to have no more visible means of support than a balloon.<sup>(28)</sup>

現代生活のせわしさととはまったく無関係に生きている人々は *the Spectator* (1711年発行)などを注意深く読み、“the Atlantic”を“new magazine”<sup>(29)</sup>と呼んでいる。ようするに Deephaven は英国的な伝統が根強く残っている社会であり、教会に集まってくる人々は現代アメリカ人の顔つきとは程遠い、植民地時代の先祖の顔そのままである。“many provincialisms”<sup>(30)</sup>(多くの方言)が存在しているこの土地では Chaucer の作品に出てくる言葉が、今だにしばしば使われるのを耳にする。こういう所では新しいものが異質にしか見えない。Miss Brandon の墓でさえ他の古い墓の中にあっては “so new and fresh that it seemed inappropriate”<sup>(31)</sup>である。製造工場すらないこの村は、他のどこよりも “the lazy little English seaside towns”<sup>(32)</sup>に似ていることになり、“not in the least American”<sup>(33)</sup>と結論づけられる。

Deephaven のことを誰かが “A stupid, common country town”<sup>(34)</sup>と手紙に書いてきたのを読んで、Kate と語り手はひどく憤慨する。このことから、語り手は見たままを淡々と描写していても、つきない興味を対象に抱いていることがはっきり分かる。語り手は作者の分身であるが、ニューイングランドにおけるこうした社会にたいする作者の関心と興味を同時代の女性作家たちも共有していたのである。Donovan は、工業化以前の生活への女性作家たちの関心は、彼女たちが女性であるということから生じてくると *New England Local Color Literature*<sup>(35)</sup>のなかで指摘している。19世紀ニューイングランドの田園では Matriarchy (女家長制)あるいは女性中心の生活があった。その原因は多くの若い男性が南北戦争で死んだことである。あるいは男たちは一旗上げるために西部や都会に出かけて行ってしまったため、後には母親と母親の価値観の支配

する世界が残った。女性作家は、こうした女家長制の世界と、女性の持つ文化、herbology (薬草学) や witch craftなどを肯定的に描いた。*The country of the Pointed Firs* の Mrs. Todd の世界はその代表的なものである。こうした世界と産業資本主義やカルビニズムとは同調しがたいものであった。

若い男性の少ない Deephaven は老人の社会であり、また男よりもはるかに女性の数が多い。教会に出席する高齢の女性たちを観察しながら、Kate と語り手は、彼女たちの夫や兄弟は海で遭難してしまったのだろうかと思う。この村は未亡人と未婚女性を中心に形成されている社会である。ここにいる男たちは、たとえば Mr. Dick のように隠退し読書にあけくれ、牧師の Mr. Lorimer と勝負のつかない神学論争を果てしなく続けることが生きがいとなっているような人たちである。または、波止場の日だまりで“turtles”<sup>(36)</sup>のように日光浴を楽しみながら、昔話を互いにくり返している岡にあがった船員たちである。

未亡人と未婚女性の何人かは実に鮮やかな人物像を結んでいる。もっとも Kate と語り手が駅に降り立ち、乗合馬車でいよいよ Deephaven に出かけていく時、一緒に乗合わせ最初に出合った女性は、17年も夫と共に燈台の火を守ってきた燈台守の妻であった。Mrs. Kew という名のその女性は、大きくやせていて、雨風にさらされ、疲れ切って孤独であり、それでいて人が好きそうに見える。彼女と知り合いになった2人は、夏の間によく燈台に遊びに行く。Mrs. Kew は“such a wise woman”<sup>(37)</sup>である。

Her comparisons were most striking and amusing, and her comments upon the books she read — for she was a great reader — were very shrewd and clever, and always to the point. She was never out of temper, even when the barrels of oil were being rolled across her kitchen floor.<sup>(38)</sup>

夏の終りに別れを告げに燈台に行くと、Mrs. Kew がまるで本当の肉親であるかのように名残りをおしむ様子を見て、2人は初めていかに彼女が自分達のこ



とを心にかけていたかを知る。

Kate と語り手が Brandon 家に落ちて間もなく、Mrs. Patton, 通称 Widow Jim が訪問してくる。彼女はきちょうめんな感じのとても小さな老婦人で、背はしゃんとしてやせぎすで、動きまわるときは、小カマスのようにパッと敏捷に動く。一日中スズメのように喋るが、話を聞いて決してあきることがない。彼女は “an uncommonly facility o’speech”<sup>(39)</sup> にめぐまれているのである。記憶力は抜群で Deephaven で起こったことはすべて見て知っている。すべての人の秘密を知っているが、それを話すときはさすがに慎重になる。Mrs. Kew が “such a wise woman”<sup>(40)</sup> であるならば、Mrs. Patton は “a very useful person”<sup>(41)</sup> である。じゅうたんを作ることにかけては確かな才能があり、昔の薬の調合が出来、あらゆるハーブ茶の入れ方を心得ていて、病人の看護にかけては並ぶものがいなかった。病人が死んで葬式を出す段になると、彼女は葬儀の “commander-in-chief”<sup>(42)</sup> として活躍し、葬列の順序まできちんと決めることが出来た。序列のやかましい Deephaven で、並び方の順序を間違えるのは大変なことなのである。彼女の死んだ夫は立派な農場を持っていたが、夫が死んでみると農場はすべて抵当に入っていて、結婚する前よりも貧乏になって戻ってきた。

“I come back here a widow and destitute and I tell you the world looked fair to me when I left this house first to go over there. Don’t you run no risks, you’re better off as you be, dears,”<sup>(43)</sup>

2人は後で Mrs. Dockum という女性の話から、Widow Jim の結婚生活は本人が語るよりはるかにつらいものであったことを知る。Widow Jim の夫は “shif-less and drunk all the time”<sup>(44)</sup> というどうしようもない人間で、ある時、石の壺を彼女に投げつけ、彼女の額のわきにはその時の傷がいまだに残っている。その話を聞いた2人はひどいショックを受ける。

Widow Jim から、Kate と語り手は晩年の Miss Brandon の様子を聞く。

Widow Jim はむかし経済的に困窮し病気に倒れている時、Miss Brandon に助けしてもらったことを恩義に思い、晩年の彼女を最後まで世話する。若い頃は社会的でオシャレで、ボストンによく出かけていった Miss Brandon も、年を取ると気難しくなり、わずかに Kate の母親だけが家に入出入りしていた。愛する弟が姿を消し行方知れずになってしまったことで Miss Brandon は決して立ち直れなかったのである。

“A prominent link in society”<sup>(45)</sup>として Widow Tully という女性が紹介される。彼女は Manning 船長の家政婦として40年間働いて、船長が死ぬと、年金の他に船長の家と、教会の family pew (家族専用席) の使用を認められる。彼女の夫、Mr. Tully という人物が本当に存在したのかどうかという問題は、今や神話の領域に属している。彼女は良家の出身だと言っているが、興奮すると文法を無視した話し方になり、コネチカット州のある町の有料の橋番をしていたという噂がある。

作品の後半には Deephaven から離れた山のふもとに1人ぐらしをしている女性、“an archetypal Jewett figure”<sup>(46)</sup>だと Donovan が言う Mrs. Bonny が登場してくる。Kate と語り手を Mrs. Bonny の家に連れていくことになった Lorimer 牧師は、彼女のことを “one of the queerest characters he knew”<sup>(47)</sup>だと表現する。Mrs. Bonny の夫は生前、炭焼きとかご作りの仕事をしていた。彼女は小さな黒馬に乗り、“butter, berries, eggs, choke-pears preserved in molasses”<sup>(48)</sup>などの品物をかごや袋に入れて鞍にくくり付け町まで売りに来ていた。町の女性は Mrs. Bonny が衛生観念に欠けていることを知っていたために彼女の品物を敬遠した。そこでその品物は新しく移ってきた人や他所からきた船長などが買う羽目になった。とにかく彼女はいつも何とか品物を売りさばいて帰っていったのである。今は彼女は年を取ったので町まで出てくることができなくなり、Lorimer 牧師も長らく彼女には会っていない。

Mrs. Bonny の家への訪問の様子は語り手によりかなりコミカルに描かれている。Kate と語り手は Mrs. Bonny の飼っている黒い馬を一目見て吹き出してし

まう。その馬は泥と、松葉と、枯葉と、ゴボウのイガなどが、たてがみや尻尾、背中一面にくっつき、まるでバッファローみたいであったからである。その老馬は足をけがしていたが、親切な飼い主によりロープの切れ端と赤い木綿の布でほうたいされていた。馬は牧師と2人の若い女性を見て礼儀正しい鳴き声を立て、好奇の目差しを向ける。一方、片耳が立ちもう片方の耳が垂れている小がらな犬は大声で吠え始める。しかし Kate がつれてきた大きな犬を見るとすぐに退散する。

戸口に出てきて挨拶する Mrs. Bonny の服装は、男物のコートを短く切り一風変わった短い上着に仕立てたものを着、足には男用のボロボロになったブーツをはいている。ショート・スカートにエプロンを何枚もかさねて付けている。一番内側のエプロンが正式のものであることが、外側のエプロンを数枚外して、部屋のすみにほうり投げたことで分る。頭にはナイト・キャップをかぶり、あごの所で紐で結んでいる。語り手は最初 Mrs. Bonny がそのキャップをぬぎ忘れたのかと思うが、やがて飾りであるかのようにきちんとかぶり直し、紐をきつく結んだことからそうでないことを知る。ニワトリがたくさん部屋の中にいたが Mrs. Bonny が追い払うと、みんな戸口にあつまって人間たちの話を一言も聞きもらすまいとしている。そのうち2、3羽のニワトリが少しずつ、こっそり部屋に入り込んでくる。

Two or three of the exiled fowls had crept slyly in, dodging underneath our chairs, and perched themselves behind the stove. They were long-legged, half-grown creatures, and just at this minute one rash young rooster made a manful attempt to crow. "Do tell!" said his mistress, who rose in great wrath; "you needn't be so forth-putting, as I knows on!"<sup>(49)</sup>

Kate がのどが渴いたのでタンブラーを1つ貸して下さいと頼むと、Mrs. Bonny は椅子に乗り高い所にある戸棚に頭を突込み、乾燥ハーブ、古靴、古新聞の束

などを片端から外に放り出しながら次第に柵の奥深くわけ入っていく。ついにはスッポリ姿が隠れてしまうほどになるが、ついにタンブラーを見つけ出し勝利感に浸りつつエプロンで拭いて Kate に渡す。

Mrs. Bonny の人間にたいする批判精神はなかなか旺盛で、Reid 牧師が時々小学校で行う説教について “he never seems to have nothin’ to say about foreordination and them p’int<sup>s</sup>”<sup>(50)</sup> と批評する。眼鏡をかけて Lorimer 牧師に話をする時の Mrs. Bonny は “an expression of extreme wisdom”<sup>(51)</sup> を浮かべている。彼女は一言でいうと “peart”<sup>(52)</sup> (現在は使われていない「賢い」という意味) なのである。Kate と語り手は後に何度か彼女を訪問し、一緒に森を散策する。彼女はあらゆる薬草、樹木、小動物について精通していて、鋭い観察眼を自然に対して持っている。しかし同時に、彼女は “an amazing store of tradition and superstition”<sup>(53)</sup> であり、タバコを驚くほど吸うので、2人は一緒にいると心のやさしいインディアンとすごしている気になる。Mrs. Bonny の生活ぶりは、人里離れた所に住んでいるが、馬も犬もニワトリも文字通り家族として一体となって孤独に耐え共同生活を営んでいるのであり、これこそしたたかな生き方であるといえる。

力強い Mrs. Bonny と対照的な、生きている幽霊ともいえる Miss Sally Chauncy が最後に紹介される。Kate と語り手はときどき Deephaven の人々が、ある人物やことがらに関して自己満足をこめつつ、 “as dull as East Parish”<sup>(54)</sup> と言うのを耳にする。2人は一体その退屈な East Parish とはどんな所だろうかと好奇心を抱き、ある日出かけていく。East Parish を歩いていると、かなり以前から廃屋と化していると思われる大きな屋敷を見かける。幽霊が出そうなその家の戸が半開きになっているので好奇心をそそられ、玄関の前に置かれていた板を乗り越え中に入ろうとすると、突然1人の老婦人が姿をあらわし見とがめる。その老婦人は堂々としていて、着古した黒じゆすのガウンをまとっている。ガウンの袖はだぶだぶで裾は寸ずまりであった。頭には山高でひさしが狭い黒いボンネットをかぶっている。2人共叱られた子供のような気分になるが、Kate

はとっさに道を尋ねてその場をやりすごす。

Miss Honora から後でその老婦人が最も貴族的な家系の Miss Chauncy という不幸な宿命を背負った人物であると聞く。彼女の一族には、約束を破られたある船員の呪いにより “none of the family had died in their beds, or had any good fortune”<sup>(55)</sup> となったという言い伝えがある。Chauncy 家崩壊の歴史は没落した南部の旧家にありそうな歴史である。Miss Chauncy の父親は船員の呪いによってか、事業に失敗し、貧困生活のなかで “partially insane”<sup>(56)</sup> な状態で死ぬ。兄弟の 1 人は若い海軍将校であったが、ある日彼女に自分がいなくても 1 人で生活していけるかと聞く。彼女は彼が航海に出るのだろうと思い「はい」と答えると、数分後彼は自室でピストル自殺を遂げてしまう。もう 1 人の兄弟は気が狂い狂暴で手がつけられないので、何年間も鎖につながれたままになる。Miss Chauncy 自身も気が狂い、面倒を見る人もないまま精神病院に長い間入っている。奇跡的に正気に戻り、家に帰ってくるが、病院の費用の支払いのため後見人が家財道具一切を売り払ってしまっていた。以後彼女は現実というものを認めることをやめ、楽しかった少女時代の記憶の中にのみ生きようとする。

Kate と語り手は Miss Honora のメッセージとさし入れのものをバスケットに入れて、再び Miss Chauncy の家を訪れる。隣家の少女の案内で廃屋に入り、クモの巣が張り、ニワトリが歩きまわるなかを階段の下にいて待つと、彼女が降りて来る。Miss Chauncy は育ちのよい少女時代そのまま、礼儀正しく若い頃のボストンでの女学校時代の同窓生のことなどを話す。Kate が Miss Brandon のことを話題にすると、彼女は Miss Brandon は親しい友人であったが最近会っていないと答える。Miss Brandon が死んだことを分からせようとしても彼女は、“I do not comprehend the strange idea!”<sup>(57)</sup> と言って認めようとはしない。それでも聖書を朗読する時だけは、実に美しく感動的に読み、心の平安をとり戻す。Kate と語り手はボストンに帰ってからその年の初冬に Miss Chauncy が死んだことを知る。体があまりに弱ったので、隣人の家で冬を過ごしていた彼女は、自分の家にたいする愛着が強いため、こっそり脱け出して自宅に戻っ

てしまうのであった。2度目に人目をぬすんで自宅に帰った時には、体力が弱っていて2階への階段を登れずに、坐り込んでいる所を発見される。その後すぐ彼女は死ぬ。

作品の最終章でいよいよ Deephaven を去るにあたって、Kate と語り手はもし2人がボストンから来た人間でなく地元の人間であったなら、こうも楽しく過ごせなかったのではないかという問を自分たちに発する。

“I suppose if we really belonged in Deephaven we should think it a hard fate, and not enjoyed it half so much as we have this summer,” said I.<sup>(58)</sup>

都会で味わえるさまざまな楽しみ、昼食会、音楽会、読書クラブ、バザー、訪問などが全部なく、刺激を受ける機会もなくなり退屈しきってしまうだろうと語り手は予想するのである。それに対して Kate は “success and happiness are not things of chance with us, but of choice”<sup>(59)</sup>だと答える。つまり Deephaven で過ごしてもつまらなかったかも知れないのであり、楽しくするかどうかは彼女たち自身にかかっているのだと考えているのである。

与えられた条件や状況を出来るかぎり活用しようという態度が、この作品における2人の主人公たちの基本姿勢であって、それがこの作品を面白くしているのである。2人は outsider であったが、Kate が生粋の insider ともいえる故人 Miss Brandon の親戚であるということを徹底的に生かしている。また相手が一旦話し出すと、決してその機会をのがさず実に巧みに対応するため、普段は無口な船長までがすべてを洗いざらい話すことになる。相槌の打ち方がうまくて相手をその気にさせるというだけでなく、自分達も本気で興味を抱くのである。

“Captain Sands” の章でいろいろのガラクタを処分せずに大切に倉庫にしまっている Captain Sands にたいして語り手は、“because we have the same fashion of keeping worthless treasures, and we understood perfectly how

dear such things may be”<sup>(60)</sup>と理解を示す。“The Circus at Denby”の章では、田舎にくるいわばドサ廻りのサーカスだということはよく分っているし、また正直にそう述べてもいるが、実際生まれて始めてサーカスを見に行くように2人とも興奮してしまふ。Deephaven から遠出をして田園の散策をしながら、農家の人と話しをする切っ掛けを作るため2人が取った戦術は、農家に立寄り水を一杯くださいと頼み込むことであつた。それを手掛りに話しをして親しくなろうとするのである。また2人は農家の人たちに Deephaven の最新のニュースを提供出来た。夏の終り頃には大勢の人たちと知り合いになり、彼らが見知らぬ人間にたいしいかに強い好奇心を抱くかを理解している。

水を一杯下さいと、いわば誘いの水をむけはしても、Kate と語り手は不自然にならないよう、また目立ちすぎないように常に慎重に対応すべく、努力している。これは受身の積極性とも言うべき姿勢である。Widow Jim のように “an uncommon facility of speech”<sup>(61)</sup>がある女性や、あるいは Mrs Bonny のように個性あふれる力強い女性と対する時は、彼女たちの行動を観察し話しを書きとめるだけで、鮮明な人物像が浮かび上ってくる。彼女たちこそ与えられた条件や状況を出来るだけ活用している人達であるのだ。そうでない場合は、2人は相手の話を円滑に引き出すために、自分達自身に自己暗示をかけているのではないかと思うほど強い興味を示すことにより、面白さを一層増幅させる効果を上げている。

Deephaven のことを “A stupid, common country town”<sup>(62)</sup>と誰れかが手紙に書いてきたのを読んで、Kate と語り手はひどく憤慨するが、大方のボストン人にとってはそう思えただろうことは容易に想像できる。語り手自身もこの村には “no exciting historical associations and none of the veneration which one has for the very old cities and towns abroad”<sup>(63)</sup>だと認めている。だが語り手は、多くの人々がこの村の通りを歩き家に住んだのだというごく平凡な歴史の重味、つまり田園における “the spirit of the past”<sup>(64)</sup>を理解している。そこで作品における日常生活のあらゆる興味深い部分が強調されるのである。そ

の操作は決して改ざんではなく、あくまでもアクセントの置き方の問題であり、一種の編集であるのだ。語り手の視点には、平凡に見えるどこにでもある話しが、実は人間生活の本質であり、それこそが一番面白く貴重なものであるという作者 Jewett の信念が反映している。そのため *Deephaven* での人々の生活の、明るい部分も暗い部分も含めて、単なる写実とは違った血が通った田園、風俗が描かれることになる。

〈注〉

- (1) Ann Romines, "In *Deephaven* : Skirmishes Near the Swamp," *Critical Essays on Sarah Orne Jewett* (Boston : G. K. Hall & Co. 1984).
- (2) *Ibid.*, P. 43.
- (3) Sarah Orne Jewett, *The Country of the Pointed Firs* (The Travellers' Library, 1951), P. 17.
- (4) Sarah Orne Jewett, *Deephaven* (Cambridge: The Riverside Press, 1877), P. 7.
- (5) *Ibid.*, P. 8.
- (6) *Ibid.*, P. 1.
- (7) *Ibid.*, P. 1.
- (8) *Ibid.*, P. 1.
- (9) *Ibid.*, P. 2.
- (10) *Ibid.*, P. 2.
- (11) *Ibid.*, P. 4.
- (12) チャールズ・ビーアド他, 『アメリカ合衆国史』(東京:岩波書店, 昭和39年).
- (13) *Ibid.*, P. 213.
- (14) *Deephaven*, P. 6.
- (15) *Ibid.*, P. 6.
- (16) *Ibid.*, P. 6.
- (17) *Ibid.*, P. 6.
- (18) Josephine Donovan, *Sarah Orne Jewett* (New York : Frederick Ungar Publishing Co., Inc., 1980), P.33.
- (19) *Ibid.*, P. 33.
- (20) *Ibid.*, P. 33.
- (21) *Deephaven*, P. 82.
- (22) *Ibid.*, P. 82.
- (23) *Ibid.*, P. 82.



- (24) *Ibid.*, P. 83.
- (25) *Ibid.*, P. 84.
- (26) *Ibid.*, P. 83.
- (27) *Ibid.*, P. 83.
- (28) *Ibid.*, P. 87.
- (29) *Ibid.*, P. 84.
- (30) *Ibid.*, P. 94.
- (31) *Ibid.*, P. 74.
- (32) *Ibid.*, P. 117.
- (33) *Ibid.*, P. 117.
- (34) *Ibid.*, P. 101.
- (35) Josephine Donovan, *New-England Local Color Literature* (New York : Frederick Ungar Publishing Co., Inc., 1983), P. 8.
- (36) *Deephaven*, P. 103.
- (37) *Ibid.*, P. 20.
- (38) *Ibid.*, P. 20.
- (39) *Ibid.*, P. 76.
- (40) *Ibid.*, P. 20.
- (41) *Ibid.*, P. 63.
- (42) *Ibid.*, P. 63.
- (43) *Ibid.*, P. 66—67.
- (44) *Ibid.*, P. 76.
- (45) *Ibid.*, P. 85.
- (46) *New England Local Color Literature*, P. 39.
- (47) *Deephaven*, P. 231.
- (48) *Ibid.*, P. 231.
- (49) *Ibid.*, P. 237—238.
- (50) *Ibid.*, P. 235.
- (51) *Ibid.*, P. 237.
- (52) *Ibid.*, P. 237.
- (53) *Ibid.*, P. 243.
- (54) *Ibid.*, P. 267.
- (55) *Ibid.*, P. 273.
- (56) *Ibid.*, P. 273.
- (57) *Ibid.*, P. 278.
- (58) *Ibid.*, P. 291.

- (59) *Ibid.*, P. 292.
- (60) *Ibid.*, P. 141.
- (61) *Ibid.*, P. 76.
- (62) *Ibid.*, P. 101.
- (63) *Ibid.*, P. 293.